

《ペスト》とジャン・タルー

柳 沢 文 昭

I ペストの意識

《この記録の主題をなす奇妙な出来事は、194.年、オランに起った。》¹ 《ペスト》の記録者、ベルナール・リュウはこのようにその物語を書き出しているが、実はペストはその何年も前からこの世界に姿を現わしていた。

ぼくは、この町（オラン）とこのペストの流行を知る
ずいぶん前からペストに苦んでいた²。

これがジャン・タルーの陳述である。彼は裁判所の傍聴席でペストの息吹きに最初に触れる。《大きな扇風機が淀んだ空気を攪拌する》³ 《息がつまりそうな》《満員の》法廷⁴ はペストの絶好の隠れ家であり、そこではかならず《ハンカチか手を口に当てて》⁵ いなければならない。まして、その法廷で裁かれている人物、断罪されようとしている人物を見つめたりしてはいけない。例えば、ムルソーから視線を離そうとしなかった《グレーのフランネルの服を着てブルーのネクタイをした、年若い》⁶ 新聞記者のようである。彼は万年筆を握るのも忘れ、ひたすらムルソーを凝視していたが、被告に死刑の判決が下される瞬間、その目を背けた。しかしそこで顔を伏せたところでもう手遅れなのだ。その非常な若さでムルソーの注意を惹いたこの青年こそタルーに他ならない⁷。

タルーは十七才の時にそのような場面に立ち合った。そして彼にとって運の悪いことに、その法廷で死刑を求刑し、《（被告の）首を得た》⁸ のは彼の父親だった。父親は判事としての自分の仕事ぶりを見せ、同じ職業に進ませようと息子をそこに招いたのであった。これは一人の父親の息子に対する健全な、模範的な配慮である、と言わねばなるまい。ところが息子がそこで体験したのは、その死刑囚に対する《目まいがし

そうなほどの親密さ》⁹ と、死刑に対する《おぞましいばかりの嫌悪感》であった¹⁰。それまで抽象的にしか死刑制度を理解していなかったこの判事の息子は、それが実際に何であったか気づいてしまった。死刑とは、《鎖につながれた一人の人間に向ってお前は死ぬのだと告げ、そして事実、目を見開いたまま殺されるのをいく夜もいく夜も断末魔の苦悶の内に待ったあげくその人間が死ぬべく手はずを整えてやる》¹¹ ことだ。死刑囚ムルソーは、《どう好意的に見ても、（近づきつつある死の）無礼なばかりの確実さは受け容れ難い》¹² という実に冷静な見解を述べている。通常、死は人間から自由を剝奪するのだが、死刑囚の場合はさらにその死に対してすら自由は拒まれてしまう。社会は死を与えることで死刑囚を罰しようとするのではなく、逆に彼からその死を掠め取ることをもって罰とするのである。

だがタルーの意識のこの段階ではまだ《ペスト》という言葉は発せられていない。後にオランをペストが襲う時がそうであるように、不幸はそれが決定的な姿を取るまではそれと認められないし、またそれを率直に名指す決定的な表現はなおいく度かの逡巡を経た後でなければ用いられないものだ。タルーにはいわば二度目の啓示が必要であった。法廷で死刑の判決が下されるのを目のあたりにして一年後、彼の父は翌朝の早起きに備え、普段は使わぬ目覚し時計をセットして床に就いた。そして、そのように父親が時たま早く起きるのは明け方に行なわれる死刑の執行に立ち会うためであるのを彼は知っていた。翌日、彼は決意を固め、そのような父親のいる家を出た。彼は、《死刑制度の上に安んじている社会》¹³ を倒すために闘争を開始する。おそらく彼は、現代の政治的な教会とも呼ぶべきものに加わったのだ。だがその組織もまた、何人も処刑されずにすむ世界を創るためと

いう口実の下に死刑の宣告を下すのであった。彼もやはり同志達同様、目的によって手段は正当化されるものと、いく分、信じていた——決定的な体験をするその日まで。彼はハンガリーで銃殺が執行されるのを見てしまうのである。かつて十七才の日に、法廷で彼を襲ったのと同じ目まいが彼を再度、見舞い、それとともに想像だにできなかった世界のヴィジョンが彼にもたらされる。

ぼくには分った。他の人よりも善良な人々と言えども今日では人を殺さないわけには、あるいは殺させないわけにはいかないのだ。なぜなら、……この世界では我々が一つ動作をしようものなら、かならず人を死なせる危険があるからだ¹⁴。

カリギュラがその《死刑論》で説いたように今や、《死刑の執行は世界を包括する¹⁵。》

タルーはそれまで、自分が完全に自由な人間として死刑囚との連帯に生きていたと信じていたが、それは幻想に過ぎないということが明らかになった。彼は知らずに死刑執行人あるいは検事の側の共犯でもあったのだ。そして、それだけではない。彼が今、踏み入った世界——高度に政治化された警察国家のようなものを具体的には想像するしかないが¹⁶——では、我々の善意の動作が誰の死の原因になるかも知れず、と言うことはまた逆に、誰の迂闊な言葉が我々を銃殺隊の前へ引き出すかも知分らない。それは単に死刑執行人とその犠牲者、死刑囚と判事が共存する世界ではない。それは、《犠牲者がしばしば人殺しともなる》¹⁷ 世界である。これはペストの世界である。ペストに感染した患者は必然的に、同時にペストを感染させる者でもある。ここに至ってタルーは、自分が不治のペストを背負い込んでしまったことを自覚する。

その時以来、ぼくは良く眠ったことがない。

ぼくの口の中には、いやな後味が残ってしまった。¹⁸

それにしてもタルーのこの告白は、不条理の認識の果に錯乱し、自ら《ペストの代りを果

す》¹⁹ と宣言したカリギュラの言葉になんと良く似ていることか：《いちばんいやなのは、口の中のこの味だ。血でもなく、死でもなく、熱でもなく、それがみな一緒になった味だ。》さらに：《眠りが、寛ぎが必要なのだが、それが不可能なのだ。》²⁰ 確かに両者ともに、最大のスキャンダルである人間の死に躓いている。だが、カリギュラの場合、《神々の愚劣と憎しみ》²¹ が人間にもたらす死が問題であるのに対し、タルーにあっては、《すべてを知っていると思い込み、そのために殺人を己れに許してしまう無知という悪徳》²² の作り出す死、つまり人によってもたらされる死が問題なのである。摂理としての死は神々の手で自然世界の中に忍ばされているが、死刑は人間の社会の産物だ。不条理は精神と全創造との対峙において兆し、それ故、一個のアプリオリであったが、ペストの意識は人間とその制作物との間にしかあり得ず、その限りで歴史的なものなのだ。または、ペストとは歴史世界の生み出す不条理だ。そのために、カリギュラが形而上学的反抗の道を選んだのに対し、タルーはまず社会変革を目差したのである。

II リュウとタルー

形而上学的反抗者はかならず狂気の皇帝へ行き着くわけではない。中には医者を目指す者もいる。リュウの場合がそれに当るのだが、彼は年令のせいもあり、《より節度ある》¹ 反抗者である。

タルーは当然リュウに、《君は人が銃殺されるのを見たことはないだろう》² と訊ねる。一方、その医者としての経験からリュウがタルーに発する問は、《君は死ぬのを拒否する人々がいるのを知っているか、女が死に際し「いやよ！」と叫ぶのを聞いたことがあるか》というのだ。これら二種の問いかけは、二人の友人の立場の違いを明らかにする。リュウは神が行なう殺人を弾劾する一群の人々に属している。彼は、医者となって人間の死の光景を目にせざるを得なくなるや、《自分はそれに慣れることはできないということが分った。……そしてその嫌悪感は世界の秩序自体に向けられているように思えた。》

そしてそこから次のように結論する：《……世界の秩序が死によって律せられているのなら、神などは信ぜず、神が沈黙している天の方には目も上げず全力を尽して死と戦うのが神にとっても良いことなのではないだろうか。》³《反抗的人間》に、《形而上学的反抗者は、……かならず無神論者であるというわけではない。が、彼は必然的に瀆神者である》⁴と述べられていると、リュウのこの《ヴィニー好みの考え方》⁵は無神論（athéisme）のそれではなく、反神論（antithéisme）のものである。前者が神の《非存在を確認する》だけであるのに対し、後者は《神をより有効に拒否するためにその存在を一瞬、認める。》⁶ リュウはこの意味では神を信じている。絶えず否定されるべきものとしての神を、あるいは悪の原理としての神の存在を措定しているのである。だからこそ、リュウがイエズス会士のペストについての説教を反駁している際中に、タルーが唐突に《君は神を信じているのか》という質問をすると、彼は《ためらった》後でないとそれを否定する回答ができないのだ。⁷ それとは対照的にタルーはリュウの《でも君は神を信じていないだろう》という問をあっさり認める。⁸ タルーのペストの世界には、彼の挑みかかるべきいかなる神も住まっていない。そしてそれは言うまでもなく、そのペストの完全に人間的な起源に由来している。

リュウを始めとする人々が人間の死を反抗をそそる悪として捉え、その一切の責任を神に負わせようとするのは、彼らが人間の本質的な無罪性を確信しているからに他ならない。実際、オランがペストの災禍を脱した直後、己れの無力さを数知れぬ患者の死から思い知らされたにもかかわらず、妻を異郷に死なせ、最後に親友を疫病に奪われたにもかかわらず、彼が内心で確認し反芻するのは《（人間達の）力と無罪性》⁹なのである。だから無論、彼はペストに人間の罪業へ報いる神慮を見ようとするパヌルー神父とは真向から対立する。彼は、悪疫と死との神学的意味づけとしての《集団的な懲罰という観念を愛するには、余りに長く病院で働きすぎている。》¹⁰ その上なぜ、いったい子どもまでが苦し

み死ななくてはならないのか：《彼だけは少くとも罪がなかった、》そのことは神父だって良く知っているはずだ。¹¹ アブラハムの一件で人間の信用を得て以来、神は無垢な犠牲を人類に要求し易くなったものと思われる。

それに対してタルーの場合：

ぼくが若かった時、ぼくは自分は無垢だという考えを持って生きていた。つまり何の考えも持たずに生きていた。……ある日ぼくは考え始めた。今となっては……。¹²

今はペストの支配の下にある。彼はペストの意識に《絶えず執着した。つまりそれを考えた。》¹³ それに伴い彼は無罪を確信することができなくなった。ペストとは罪の意識のことでもあるのだ。まず、自分の父親が極度に洗練された首切り役人の職務を果すのを長年に渡りある意味で許して来たという事実が経験的な、個人的な側面から彼の罪の自覚を支え、次いでペストが《世界を包括する》ようになるとともに、それはすべての人間を呑み込む。このような有罪性の自覚に相応じ、リュウとは対照的に彼は《通常の死》——それがペストによるものでも——に対しては驚くほど冷静だ。《自然なのは細菌の方なのだ》¹⁴ と彼は言う。またペストが猖獗を極める中、

まだまだ犠牲者が出るだろう。なぜならそれが決りなのだから。¹⁵

と、つぶやく。《母親の葬式で涙を見せなかったために》¹⁶ ムルソーに死刑を宣した法廷ならばやはりこのような沈着さを理由にタルーを断罪するだろう。さらにまた、リュウの反抗心をあれほど煽り、パヌルー神父に苦渋と克己に充ちた第二の説教を書かせるきっかけとなったオートン判事の息子の死に関しても彼は沈黙を守っている。いったい、自分と同じ判事の息子が完全に無垢であったと信じるのが彼にできたのだろうか。

人間の無垢を疑わないリュウはまた、その故

に人間に加えられるいかなる攻撃も責苦も不当なものであると考える。だから彼にとっては、たとえ《勝利が常に暫定的なものであろう》と、それは《闘いを止める理由にはならない。》また、無垢による保証を受けていると感ずるため彼は、その闘争の宿命的な様相である《果てしない潰走》を耐えることもできる。¹⁷ つまり彼は戦いの中で自分の部署を離れるのを断固、拒む。だから彼にとっての最大の徳は《誠実さ》、即ち《自分の職業を遂行すること》¹⁸ に存する。そしてこれはカミュが《人間の救済》と呼ぶものの、《世界の外に位置せず、歴史を通じて》実現される救い¹⁹ を可能にする唯一の妥当な手段であろう。その意味でリュウは、《ぼくの興味をそそるのは人間でいることだ》²⁰ と言う。このようにしてリュウは、神々の不正によって《打ち負かされた者達との連帯》²¹ に身を持し、パヌルー神父の信じる神の不倶戴天の敵としてその祭壇からいく人かの贅を奪い返すべく、《現にこのようである創造世界》²² ——ヴィニーによると《産まれ損ねた世界》²³ ——の修正を任務とする反抗的医師となるのである。

一方、無垢の意識の慰めを持たないタルーにとっては勝利は見かけ上のものであってはならないし、まして敗北を甘受して生き続けることはできない。やがて疫病からの市の解放間際、死に直面するタルーの関心はそのことにしかない。

もし勝負に敗けるのならば、良い終り方をしたい。²⁴

そうだな……ぼくは勝負に負けそうだ。²⁵

タルーには、ある決定的な勝利が必要なのだ。やがてリュウも、タルーにとって《勝負に勝つ》ということが何を意味していたかと自問せずにはいられなくなる。²⁶ そして彼にとっての勝利とは、《内心の平和》である。

ぼくの興味を惹くただ一つのことは……内心の平安を取り戻すことだ。²⁷

故に、《平安か、それがだめならば良き死を》²⁸ と彼は願う。だがこれはリュウの目差していた救いに較べて、なんと孤独な勝利であろう。医師リュウはまず何よりも他人を癒すことを欲する。だがそのような連帯は無垢な人間どうしの間でのみ可能なのであって、タルーのペストの世界においては望むべくもない。死刑囚と裁判官が救い合うことなどあり得ない。事実タルーは息子をペストで奪われたオトン判事を前にして、《彼のために何かをしてやらなくては行けないが、いったいどうやって判事を助けたらよいのか》²⁹ と考え込んでしまう。

タルーにとってはまず自分がペストから快癒することが問題なのだ。だがこの孤立はペストの下にあってはむしろ、《被害を大きくしないためにも》³⁰ 望ましくすらある。患者はまず隔離されねばならないのだ。タルーは自分自身に対し隔離措置を厳格に適用する。³¹ 彼は《近くからだろうと遠くからだろうと、良い理由によるにしろ悪い理由によるにしろ、人を死なせたり、人を死なせるのを正当化するものすべてを拒否する決意をする。》³² だが、それは、《誰が最も多くを殺すか競いあっている》のが《歴史》の現状である限り、³³ 歴史からの自己隔離を意味している。

人を殺すのを放棄した時から、ぼくは自分を決定的な追放に処したのだ。歴史を作って行くのは他人達だ。³⁴

つまり、ペストの意識の基盤は本来、政治と行為の世界にあったにもかかわらず、彼は歴史の外に救いを求めに行くのである。

さて、歴史的次元を棄てたタルーは以後、何に向うのか。

たとえば、……ぼく自身が悪疫そのものとなるとしても、少くともぼくはそれに同意はしない。ぼくは、罪なき殺人者であろうと努める。³⁵

ここでは、罪を犯す可能性に対する拭い切れぬ不安と、他方、それを無垢に向って乗り越えよ

うとする決意、あるいは無垢への郷愁とが、タルーの魂を争い合っている。このような緊張関係、問題的地位はあらゆる宗教的心性の起源を成すものだ。カミュは一度、罪と聖性との弁証法に親しんだことがあった。《キリスト教形而上学とネオ・プラトニズム》中、グノーシス派を扱った章で彼は以下のようにそれを説明している：《バシレイデスは殉教者達の運命に強く感銘を覚える。彼によると無益な苦しみは存在しない。どの苦しみも、それを正当化し得るそれに先立つ罪を要求する。故に殉教者達は罪を犯しているのだ。そしてまた、その状態は彼らの聖性と完璧に折り合う。自分達の過去を完全に贖うことができるというのが正に彼らの特権なのだ。》³⁶ つまり罪が清めの道を拓くのだ。これによってタルーの宣した《罪なき殺人者》は形容矛盾、思惟の袋小路たることを免れる。それどころか、罪ある者のみが聖性に手を伸ばせばとどくのだ。だが、神の沈黙すら耳にすることのないペストの空と、憎悪によってすら神には結ばれていないペストの大地との間でどのようにして聖性が可能なのか。

神なくして人は聖者になれるか。これが今、ぼくの知る唯一の具体的な問題だ。³⁷

これは次章での我々の問題ともなろう。

ペストは余りにも深く人間の条件に根差しているのだ、タルーにとってペストからの回復は人間からの脱出としてしか実現されないかのようである。人間として止まることを望んだリュウがそのことを誰よりも良く知っている。彼によるとタルーは《自分に想像もつかない何かに向って人間を越えて語りかけた。》³⁸ タルーは歴史から退き、神学的な地平に身を移したと言えるだろう。彼は《無神論的神秘家》³⁹ となろうとしている。

III 神なき聖者

《聖性の模範はキリストの生涯によって与えられた。》⁴ 故に、聖性は《愛によってキリストの受難(Passion)の中に入り、共感(compassion)

によってそれに参与すること》² で可能となる。

リュウがタルーに、彼の求める内心の平和に至る道は何なのかと訊ねる時、彼もやはり、

共感(sympathie)だ、³

と答える。そしてそれは犠牲者への、つまり裁かれる者、断罪される者、処刑され行く者達への共感である。

ぼくは犠牲者達の側に身を置こうと決めた。……それらの者達に交じって、ぼくは少くともどうしたら……平安に達することができるか探し求めることができるだろう。⁴

かつて父が翌朝、死刑の執行に立ち合うのを察したタルーはその夜、誰とも知れぬ死刑囚のために一睡もできなかった。⁵ 使徒達ですら主の処刑前夜、眠りこけたと言うのにである。

彼はハンガリーで一人の死刑囚が処刑されるのを目撃したことがあった。方法は銃殺である。銃殺刑を見たことがない者達の想像を裏切って、銃殺隊は死刑囚から一メートル半ほどの至近距離で目標に銃を擬する。目標とは目の前の男の胸部の一点だ。だから事が完了すると、彼らは

こぶしが入るほどの穴をそこに作ることになる。⁶

詳細に描写される処刑の情景のおぞましさの陰に隠されてはいるが、ここで暗示されているものは見過されようがない。それは、《デドモと呼ばれるトマス》がその手を差し入れた⁷ キリストの脇腹の傷である。それでなくともタルーがペストとともに失われた《平安》を嘆き、それをしかしながら矜持を保った声で乞い求める時、傷口を使徒に示しに現われたキリストの言葉、《平安があなたがたにあるように》⁸ がそれに応じるのを聞く思いがする。死刑囚はキリストなのだ。ただし復活の希望のないキリスト、己れの罪あることを意識しているキリスト、⁹ 正義の名において殺される、即ち正義から見捨て

られたキリスト、つまり神を持たぬキリスト¹⁰である。カミュはムルソーを《我々にふさわしいただ一人のキリスト (christ)》¹¹と呼んでいる。それに事実、イエスは法的な手続きを踏んだ死刑囚として死んだのであり、十字架は何よりもまず処刑の道具であったということを忘れるべきではない。¹²

つまり、タルーは法廷で、次にハンガリーの刑場で神なきキリストの《受難》に立ち合っただけ、と言うことができる。そしてそこでは、《波のような恐るべき本能が（彼を裁かれている者の方へ）頑なな盲目さで運び去り、¹³ またすべてをさし置いて彼の《関心事は胸にあげられた穴》となってしまう。このように彼は受難における神なきキリスト、あるいは死刑囚中最も汚れを知らぬ者への愛と共感において自分を清めるべく、《神なき聖者》の道を歩み出す。¹⁵ そのため彼のなした最初の行為は、やはり自分を《父》から切り離すことであった。

聖性を望む者はまず手始めに、イエスがそうしたのと同様、砂漠に引きこもり試練を求めねばならない。だが、《もはや砂漠はなく、狐島もなく、だがその必要だけは感じられる》¹⁶ この世紀にあって、どこに砂漠を求めたら良いのか。砂漠を砂漠の中に求めても空しい。なぜならば、《人はそこに詩を詰め込みすぎた》からだ。それを良く承知していたデカルトは《当時の最大の商業都市》を選んだ。《だがアムステルダムは、三世紀このかた美術館で覆いつくされた。詩を避け、石の静けさを取り戻すには別の砂漠、魂もなく、寄る辺もない別の場所が必要だ。オランはそのような場所の一つである。》¹⁷ 《ミノタウロス、あるいはオランの憩い》の中でカミュはこのようなオランの街を紹介している。

リュウの描写を信頼するならば、オランとは《鳩のいない、木も庭もない、羽ばたきの音にも葉ずれの音にも出会わない街、一口で言えば中性の場所》¹⁸である。そしてタルー自身の手記によると彼は、《その外見、賑わい、それに娯楽に至るまでが取引上の必要によって扼されているように見えるこの街の商業的な性格に決定的に惹かれた。》彼の手帖の中のオランへの讃辞

は、《遂に！》という感嘆の吐息で締め括られている。¹⁹ 遂に彼はオランに砂漠を見出したのだ。

ロベール・ド・リュペがオランにおけるタルーの日常を実に適格に要約している：《タルーは……不条理の回心者であり、この街にとっては異邦人である。彼は「シジフォスの神話」を小脇に抱え、街路を散策し、自分の意識を目醒めさせておくため、手帖に、いかなる意味も呈さぬ瑣末事を書き留める。》²⁰ 意識を覚醒させておく。これこそ彼の試練なのだ。橄欖の山のエピソードを引くまでもなく、福音書においては《目醒めたままであれ》という警告が度々イエスの口からくり返される。²¹ それに、我々がキリスト、ムルソーも誰の関心も惹かぬような新聞広告をスクラップブックに貼り、²² また日曜の午後を窓の下を通りの人込みの観察に費やしていた。²³ このような意識の覚醒の試み、現在時を汲み尽そうとする企てにおけるタルーとムルソーの類似は他にも多々、指摘し得る。²⁴

オランでは普段でも眠らずにいることは至難の業だ。なぜならば、《オランという街は螺旋をなす一つの大きな壁、》即ち《迷宮》であり、そこには迷い込んだ者を貪り喰うべく、《倦怠》という名の《ミノタウロス》が棲んでいるからである。²⁵ そして、ミノタウロスのオランとペストのオランとの間にいかなる相異があるだろう。ペストの下でも迷宮の中と同様、人々は《どうどう巡り》²⁶ と《果てしない、息のつまる足踏み》²⁷ と《くり返し》²⁸ を宿命づけられ、その結果、《街は目を開いたまま眠っている者達で一杯になる。》²⁹ いずれにせよ人々はオランに幽閉され、そこでペストに貪り喰われるのを待つだけだ。死は絶対の倦怠に他ならない。

そしてそのペストの餌食となった者達は、《市の門の外、街の東方にある昔の火葬場》へ夜な夜な運ばれて、焼かれる。そのため《朝方になると、……吐き気を催させる濃いもやが街の東の地区の上にただよい、》《ペストの炎が夜毎にその貢物を貪っていることを》一日を生き延びることのできた市民達に思い知らせるのである。³⁰ 神なき聖者を志し砂漠に入った者にとって、これはゲヘナの火³¹であろう。エルサレム郊

外のゲヘナの谷では町の塵芥が焼かれ、そこから常時立ち昇る煙もエルサレムの住民に絶えず地獄の想念を喚起していた。³²

このように、タルーが歴史の次元を遠ざかるにつれて、オランのペストの記録が報告している出来事、そこに提示されている人物像はすべて、彼が参与しようと決意した《受難》の世界を象徴的に構成し始めるようになる。³³タルーという人物自身、神なきキリストの受難を間近く見守った者として、またそれを証す者として、彼と同じ名の使徒を思わせる。防疫組織に人員を補充しようと奔走する彼はまた、《人をすなだめる者》³⁴でもある。ペストとそのただ中でのタルーの《受難》を記録するリュウも一種の福音史家の役割を担っている。四人のうち一人は医者であったはずだ。また、疑いようのない無垢にもかかわらずペストの犠牲になる判事の子どもは、ヘロデの命令で虐殺された幼児達の場合同様、それを見守る人々にあらゆる慰めを拒否せしめるだろう。

興味深いのはコタールだ。カフカの《審判》を愛読するらしい³⁵ この男は、罪悪感と形而上学的不安とに苛まれる、あるいはそれらを銜う精神の滑稽な戯画である。クラマンズは言っている：《青年達は女を知るや否や形而上学的不安など失ってしまうものだ。》³⁶だがタルーの意見では、コタールの《あの顔では……》とうていそのような事態は望みようがないし、かと言って彼には娼婦を買いに行くほどの勇気もない。³⁷要するに彼もまたペストが始る以前から隔離と追放の状態に身を置いていたのだ。そしてペスト到来と共に、その同じ境遇は万人のものとなり、彼は少くとも《他人達と一緒に》孤独であるようになった。ある意味では孤独は解消された。それも、《私にはすでにその経験があるのでしょ》といった優越感を伴って。タルーは結論する：《要するにペストは彼にはおあつられむきなのだ。孤独になりたくはなかったが孤独になってしまった男をペストは共犯者にする。》³⁸ 大多数の批評家がこの人物の内に対独協力者の面影を見ているように、³⁹コタールはペストのために人間を裏切る者である。タルー

は彼に、《ペスト菌をばらまくようなまねは少くともしないで下さいよ》⁴⁰と言ったことがあるが、これは単なる冗談ではない。彼はペストのユダになりかねない人物なのだ。

タルーはリュウの母親に、ある神秘的な力を認めている。初対面の際すでに彼は、《これほどの善良さの読み取れるまなざしはいつの場合でもペストよりはるかに強いであろう》⁴¹と、その手帖に記している。さらにその手記の末尾近くになると、つまり彼の最期が迫って来ると彼女に関する詳細な記述がそこに見出されるようになるが、そこで彼は、慎しみ深さ、軽やかさ、単純さといった彼女の振舞い全般に渡る特徴を挙げた後で、《これほどの静けさと陰影とをもって彼女はいかなる光の高みにでも、たとえそれがペストの光であっても、とどまることができる》⁴²と結んでいる。つまりタルーのペストの意識、nemo bonusの自覚にもかかわらず、リュウの母親のみはペストの支配を免れ、例外的な無垢の内にあるのだ。このような存在は、母の中の母、被造物中ただ一人、罪なきを得ている聖母を暗示していると言える。聖母はまた聖人中の聖人でもあった。

さらに、ジョゼフ・グランのペストからの奇跡的な回復が注目を惹く。それは降誕祭の夜に起った。リュウですらグランを見離すがタルーは夜を徹してこの病人に付き添った。すると翌朝、グランは死者達の内から甦っているのだ。⁴³やや過度の誠実さ以外に取り柄のない見映えのしないこの県庁の臨時職員の《復活》は小説中、最も喜ばしい場面として描かれ、結果的にはペストの治世の終幕の始まりを画する。誰の目から見てもこれはペストに対する人間の一つの明白な勝利である。そしてなによりも、彼を甦らせたのはタルーではないかという錯覚を我々は抱きそうになる。だからこの挿話は、それによって《イエスが自分は生のみならず死のあるじであることを……証明し、》技の日曜日の《勝利の直接の原因となった》ラザロの復活⁴⁴に批較され得る。それぞれのやり方で復活を取りなした人物の予想もしない悲劇的な死がその直後に待ち受けているという点でもこれら二つの事件は

類似している。

IV 成 就

かくして《時は来た。》¹《ペストが何処とも知れぬ巣窟へ戻るため遠ざかって行くように思えた時、》タルーの真の試練が始る。その兆候はまず彼の手帖の中に現われる。《筆跡が判読困難になり、話があまりに頻繁にあれからこれへと跳び、》内容も《初めて客観性を欠き、個人的な考察に場を譲るようになった。》² またさらに聖性探究の可能性にも疑念を抱くようになる。

たぶん人は聖性の蓋然性にしか到達できないのではないだろうか。その場合には節度と慈悲ある悪魔主義に甘んじなくてはならないだろう。³

今、タルーはその生涯における《橄欖の山》に
いるのだ。あるいはムルソーが死刑囚の独房で
体験した明け方の《最も困難な》⁴ 時刻に直面し
ているのだ。

かならず昼と夜に一時間、人は臆病になる時間があ
る。……そして自分はその時間だけが恐ろしい。⁵

だが彼もやはり逡巡のあげく苦盃を受ける決意
をかためるであろう。

まだすべきことはたくさんある……が、それは覚悟を
決めぬ理由にはならない。⁶

そして彼の身体にペストの様々な症状が現れ始
めるのは、これを手帖に記してほどなくのこと
である。

神なきキリスト即ち死刑囚とともに生きること
がタルーの選んだ道であった。ところが、十
字架上あるいは銃殺隊の前のそれらキリスト達
と生きるということは、彼らの死を死ぬことに
他ならない。そしてその《苦しみの道》を歩む
自分に課した掟は《目醒めたままであれ》であ
った。なぜならば死刑囚の死とは《目を見開いた
まま死ぬ》⁷ ことだからである。《シジフォスの
神話》の中でカミュは、《自殺者の正反対のもの、

それは死刑囚である》⁸ と述べたが、自殺者にお
いては自覚的意識としての不条理が破壊される
のに対し、死刑囚の死は確かに《意識された死》⁹
である。

タルーは常にそれを意図している。例えば意
識的な死、《死との苛酷な対座》の最大の障碍は
病気である、と《ジェミラの風》の中で述べら
れている。なぜならば、《それは死を癒す薬であ
る。それは死の準備をさせる。それは自己への
憐憫をその第一段階とする（死に対する）習熟
期間となる。》¹⁰ また殊に現代のペストの長期
に渡る支配の下では病人も死人も索引カードに
よって管理され、大量の死体も能率的に処理さ
れ、その結果、死は人々の意識に手がかりを与
えない平滑な表面を持った抽象体になってしま
う。だから彼がペストに対抗する防疫組織の設
立、運営に没頭するのは、《意識された死》に仕
えるためであると言える。¹¹ はからずもここ
では、リュウの第一の関心事である《健康
(santé)》¹² とタルーの《聖性 (sainteté)》に至
る道は交わる。

死の床にあるタルーは自分の死に欺かれるこ
とを絶対に望まない。そのことだけを彼は傍ら
で見守る友に言い続ける。

リュウ、ぼくには何でも言ってくれなくてははいけな
い。ぼくにはそうしてもらう必要があるのだ。¹³

そのことは何か意味があるのかい。¹⁴

かならず正確に答えてくれたまえ。¹⁵

彼は最後まで目をそらせたくないのだ。彼がペ
ストの高熱に打ちひしがれて沈黙している時
にも、その沈黙によって彼が、《心をそらせるこ
とはもう不可能だ、と告白している》¹⁶ とすら
リュウには思える。

このような死の強烈な意識が神なき聖性の秘
密なのだ。神と共にある者にとって死は、《修練
期間の終了》、《自由の不完全な行使である選択
の時期の終了》である。言い換えれば、《未完
成の練習》の段階を脱し《行為の完成》、《神の内

在的な活動》へ参加することによる《自由の決定的な開花》である。つまり《移り行き》である。¹⁷ 彼ら信じる者はその瞬間から、その行動を完成せしめる真の自由へ身を移す。死を巡るキリスト者の瞑想は行動へ、業へと人を駆り立てる。このような行動的信仰者にとっては、故に、認識、観想以上に軽蔑すべきものはない。¹⁸ それに対してタルーのようなあるいは小文字でしか書かれることのないキリストのような神なき者達は、上のような洗練された死の観念を練り上げることができなかった。彼らの死は粗野なものである。つまりそれは自由の絶対零度なのだ。それまで享受し得た不完全な形態での自由が不可能な形に凝固するのを手をこまねいて見る、ということだ。そしてその視力が最後に奪われる自由、即ち最後まで残る自由である。故に最後まで目を閉じてもそらしてもならない。それによって人間の尊ぶべき自由をより先まで支え通さねばならない。¹⁹ 重要なのはやはり人間の尊厳である。ただしその尊厳を怯まぬ視線によって人間自身以上に生き延ばせしめねばならない。これがタルーの求めていた聖性であろう。神と共にある者は死後もなお霊的生命を生きる。その一方で神なき聖者は全面的な亡びを目を見開いて生きる。カミュはその戯曲の一つのエピグラフに《ロミオとジュリエット》から、《O love! O life! Not life but love in death.》²⁰ という言葉を引用しているがこれは明らかに人間の言葉であり、聖者ならば《light in death》と叫ぶであろう。

以上の二つの対立する態度はパヌルー神父とタルーの言動の内に具現している。神父は、《理解の及ばぬ事を、たぶん私達は愛さなければいけないのでしょ》²¹ とリュウに言った。またさらに二度目の説教の中では、《そのようなこと(子どもの死と苦しみ)を理解するのは不可能です。人はそれを欲することしかできません》²² とくり返している。《愛する》、《欲する》それに信仰、これら三つはすべての行動中、最も根源的なものである。そして事実、彼は、ペストの惨禍を前におそらく宿命論という言葉が発せられるであろうが、それに《能動的(aktif)》とい

う形容詞が付けばその表現を受容するつもりだとも述べている。²³ 一方、それに対照的なタルーの意見が、彼の手帖のコタールの奇妙な性格に関する記述中に見られる。

……彼(コタール)は他の者達以上に理解し難い。しかし結局、そのためにかえって彼は、人が彼を理解しようという努力に他の者達以上に値する。²⁴

タルーはパヌルーの能動的信仰に理解の努力を対置する。彼はまたリュウと交した最初の会話においても、自分の《道徳》の本質は《理解》に存すると明言した。²⁵ 彼は認識の側に与するのだ。タルーはさらに、たびたび自分が《すべてを識っている》²⁶ こと、《学ぶべきことはほとんどない》²⁷ ことを確言するが、そのように即座にすべてが視界に与えられるとは観想の本質的な様相に他ならず、それに対し《学ぶ》というのは一つの行動に過ぎない。タルーにとって救いの道は《共感》に始り、《理解》に至る。この二人がそろって死を救いの契機と見なしているのはいずれにせよ確かなことだ。タルーは日頃から、《ぼくのような人間達にとって死など何でもない。それはそれらの人々を正しいとする出来事だ》²⁸ と考えていたし、他方、医師を反抗者と判断するや、その手に落ちるのを拒みペストで死ぬパヌルー神父の口からは、《キリストは私の生命であり、死は私にとって勝利である》²⁹ という言葉が容易に引き出せそうだ。だが彼らがそのような言明においてそれぞれ念願している救いの本質となると、一つとして相容れる点を持たないのである。

試練の何時間かを耐えるタルーの枕辺にはリュウとその母親がいる。十字架上のイエスもまた、最愛の弟子と聖母とに見守られていた。これら二つの場面の間では母子の関係が入れ替わっているが、聖母をその弟子に託し、死に行く者の母を残る者の母としたのはイエス自身であった。³⁰ そしてタルーは、ペストの中にあってもその汚れから奇跡的に護られているこの婦人を凝視し続ける。³¹ 自から望んだ苦行の清めの効果によって彼もまた、彼女のように《ペストの

光の高み》を陵駕し得るのだろうか。

タルーの死を見とったベルナール・リュウは、しかしながら彼の勝利の孤独、不毛、嘲弄的な性質のみに感銘を受けたようだ。リュウは次のように書いている：《タルーは彼が話していたあの困難な平安を取り戻したようであった。しかし彼はそれを死においてやっと、それが彼に何の役にも立たなくなった時に見出した。》³² 神なき聖者はペストという死に至る病からの快癒の試みであったが、それは死、正当な死によって初めて癒されることが可能であった。これがリュウの意見である。彼の頑な人間主義は、聖性を望んだ友の悲劇的な死によっても揺がされることがない。

だがこの二人はそれほど隔っていたのだろうか。タルーはかつてリュウに、《ぼく達は同じものを求めているのだ》³³ と言ったことがある。そしてそれはタルーが《真の医師》³⁴ と名づけるカテゴリーのことであった。ここにおいて確かにリュウの神への反抗とタルーの受難への意志とは相会するであろう。なぜなら《真の医師》とはおそらく、十字架上のイエスをすら治療しようと試みる医師、この無垢な生贄を神の祭壇から人間の側に取り戻そうとする医師のことであるからだ。そしてそのような《真の医師》にあって、以下のカミュの望みが実現するはずだからである：《福音書の最後の数ページ³⁵を破り取ってしまおう。そうしたならそこに人間の宗教、孤独と偉大さの崇拜が我々に対し提示されることになるだろう。》³⁶

注

I

1. プレイヤード版カミュ全集 I (以下, I と略記) p. 1219.
2. I p. 1420.
3. I p. 1198.
4. I p. 1184.
5. I p. 1355.
6. I p. 1186.
7. ブリュース・プラット (Bruce Pratt) も、タルーは《注意深くムルソーを見つめていた若い新聞記者のかたわらに座していた》と書いている：《L' Évangile selon Albert Camus》, José Corti, p. 135.
8. I p. 1422.
9. 《異邦人》においては逆にムルソーの方が若い新聞記者に対して、《自分に見つめられているような奇妙な印象 (I p. 1186.)》を受けるほどのつながりを感じている。
10. I p. 1422.
11. I p. 1425.
12. I p. 1203.
13. I p. 1423.
14. I p. 1425.
15. I p. 46.
16. 《戒厳令》においてペストがそのような全体主義体制の姿を取ったのはそのためだ。
17. I p. 1459.
18. I p. 1424.
19. I p. 94.
20. I p. 26.
21. I p. 67.
22. I p. 1326.

II

1. I p. 1323.
2. I p. 1424.
3. I p. 1323.
4. プレイヤード版カミュ全集 II (以下, II と略記) p. 436.
5. THODY Philip: 《Albert Camus 1913-60》, Harmish Hamilton, p. 98.
6. ONIMUS Jean: 《Camus》, Desclée de Brouwer, p. 46.
7. I p. 1322.
8. I p. 1427.
9. I p. 1473.
10. I p. 1321.
11. I p. 1396. また、《たとえ完璧な社会秩序の下であっても……、子どもの死は不正である》というカミュの言葉をパスカル・ピア (Pascal Pia) が報告している：《Album Camus》, Gallimard, p. 296.
12. I p. 1420.
13. I p. 1424.
14. I p. 1426.
15. I p. 1427.
16. I p. 1211.
17. I p. 1324.
18. I p. 1352.

19. II p. 279.
20. I p. 1427.
21. I p. 1427.
22. I p. 1322.
23. VIGNY Alfred de: 《Le Mont des Oliviers》, 146 行.
24. I p. 1453.
25. I p. 1453.
26. I p. 1459.
27. I p. 1238, それ以外にも p. 1425, p. 1427, p. 1459.
28. I p. 1425.
29. I p. 1417.
30. I p. 1427.
31. だが実際にタルーが病に感染した時、リュウは規則に背きこの友人を隔離せず自分の家で看護しようとする。それを知ったタルーは、《沈黙してしまう (I p. 1452)》。この沈黙は意味深く、感動的だ。
32. I p. 1425.
33. I p. 1425.
34. I p. 1426.
35. I p. 1426.
36. II p. 1253.
37. I p. 1427. このタルーの言葉はその語調によって、《シジフォスの神話》の冒頭の文、《真に重大な哲学的問題は一つしかない。それは自殺である (II p. 99)》を思わせる。実際これは、《神なくして人は人となり得るか》と言い換えられる。
38. I p. 1467.
39. GAILLARD Pol: 《Albert Camus》, Bordas, p. 100.

III

1. 《Dictionnaire de la philosophie》, Larousse, p. 273.
2. ブリュックベルジェ (Bruckberger): 《キリスト伝》, 別宮貞徳訳, 筑魔書房, p. 239. この著者はカミュが独軍占領下のフランスで——つまり《ベスト》を執筆していた頃——知り合った、《ニーチェ的キリスト教を夢想する……ドミニコ会士》: LOTTMAN 《Albert Camus》, Éditions du Seuil, p. 287, p. 290, p. 302.
3. I p. 1427.
4. I p. 1426.
5. I p. 1423. 友人が投獄されたなら、その間、自分も毎夜、地べたに寝てその苦痛を分つことが

- できる、というのが《転落》のクラマンズが考える救いの具体的な形体である (I p. 1491, p. 1492, p. 1550).
6. I p. 1424.
7. ヨハネ, 20 の 19 以下.
8. ヨハネ, 20 の 19 以下.
9. 《転落》において、罪の意識を持ったキリストが語られる (I p. 1533). また《キリスト教形而上学とネオ・プラトニズム》においても同様 (II p. 1254).
10. II pp. 443, 444.
11. I p. 1929.
12. ブリュックベルジェはルオーのキリストの《あざわられる道化の表情, 死刑囚の表情》に読者の注意を向けようとしている: 前掲書, p. 237.
13. I p. 1422.
14. I p. 1425.
15. 《シジフォスの神話》ではカミュは不条理を神なき原罪と呼び、《異邦人》のムルソーは彼にとって神なきキリストであった。そしてここでまたタルーは神なき聖者たらしめる。あたかもカミュは神を排除してキリスト教神学を構成しなおそうという野心を持っているかのようだ。
16. II p. 813.
17. II p. 814.
18. I p. 1219.
19. I p. 1237.
20. LUPPÉ Robert de: 《Albert Camus》, Éditions Universitaires, p. 81.
21. マタイ, 25 の 1 以下: ルカ, 12 の 35 以下.
22. I p. 1139.
23. I p. 1140.
24. 殊に I p. 1236 から p. 1240 まで.
25. II p. 813.
26. I p. 1294.
27. I p. 1369.
28. I p. 1350.
29. I p. 1368.
30. I pp. 1363, 1364.
31. マタイ, 5 の 22 その他.
32. 《イエズスの言葉》, 講談社, p. 18, F. パルバロの註釈.
33. 《ベスト》の象徴的、寓意的意図はそのエピグラフ (I p. 1215) によって明らかだ.
34. ルカ, 5 の 10.
35. I p. 1264. 文学方面にはうまいと思われる (I p. 1303) リュウは、この題名を見てそれを《探

- 偵小説》だと思ひ込む (I p. 1264).
36. I p. 1529.
37. I p. 1379.
38. I p. 1379.
39. LEBESQUE Morvan: 《Camus par lui-même》, Éditions du Seuil, p. 85.
40. I p. 1349.
41. I p. 1314.
42. I p. 1446.
43. I p. 1435.
44. ブリュックベルジェ: 前掲書, p. 182.

IV

1. ブリュックベルジェ: 前掲書, p. 171. ヨハネ, 13 の 1 その他.
2. I p. 1445.
3. I p. 1446.
4. I p. 1205.
5. I p. 1450.
6. I p. 1450.
7. I p. 1425.
8. II p. 139.
9. CAMUS Albert: 《La Mort heureuse》, Gallimard, p. 91.
10. II p. 64.
11. 《ジェミラの風》においてカミュは, 《意識的な死》を《真の, 唯一の文明の進歩》の要件とすらしている (II p. 64).
12. I p. 1397.

13. I p. 1453.
14. I p. 1455.
15. I p. 1456.
16. I p. 1454.
17. VARILLON François: 《Éléments de Doctrine chrétienne》, Éditions de l'Épi, p. 267 以下.
18. 同上.
19. バトリス・メルソー, カリギュラの死に際の言動はこの意味では模範的である.
20. I p. 303.
21. I p. 1393.
22. I p. 1405.
23. I p. 1404.
24. I p. 1381.
25. I p. 1325.
26. I p. 1325.
27. I p. 1324.
28. I p. 1325.
29. ピリピ人への手紙, 1 の 21.
30. ヨハネ, 19 の 26.
31. I p. 1456.
32. I p. 1467.
33. I p. 1427.
34. I p. 1426.
35. むろんキリスト復活以下のページのことである.
36. CAMUS Albert: 《Carnets I》, Gallimard, p. 206.